

1. 立地と周辺環境（図 1）

伊保古瓦出土地（伊保白鳳寺）は豊田市保見町六反田に所在し、豊田市北部の伊保川が東西方向に流れる谷の南縁に位置している。遺跡の南側には丘陵地の斜面が迫り、北側には伊保川によって開析された沖積地が広がっている。地形的に北面する、古代寺院としてはやや異例な立地である。

当遺跡周辺では豊田市舞木廃寺やみよし市下り松瓦窯（黒笹 91 号窯）など同時代の遺跡が数多く発見されており、当遺跡の性格を明らかにすることは、古代の三河国における地域間交流や仏教の普及過程を解明する上で大きな意義がある。

2. これまでの調査（図 2）

昭和 45（1970）年、伊保川の付け替え工事に伴い、豊田市教育委員会により調査が行われ、伊保川南部の段丘崖付近から、突き立った状態の性格不明の瓦列をおよそ 6m にわたり検出した。多くの瓦や瓦塔などが出土し、仏堂などの建物があった可能性が指摘されたが、その性格はあきらかでなく、「古瓦出土地」とされた。

3. 名古屋大学考古学研究室による調査（図 3）

文部科学省科学研究費「古代における谷底平野および周辺丘陵部の開発と宗教施設の展開に関する研究」の一環として、伊保川・籠川流域の古代寺院を含めた遺跡動態をあきらかにする目的で、調査をおこなっている。

本遺跡は 5 ヶ年計画で調査を進める予定であり、本年度は最終年度の 5 年目に当たる。

●昨年度までの調査

平成 29 年度には遺跡全体の地形の確認を目的に測量調査を実施し、調査区北西部に 7m × 11m の土壇状遺構を確認した。

平成 30 年度は、①29 年度調査で確認できた土壇状遺構の性格を解明すること（1・6 トレンチ）②遺跡の広がり・寺域を確認すること（4・5 トレンチ）、を目的に発掘調査を行った。土壇周辺に設定した 1・6 トレンチにおいては、土壇状遺構自体は現代の造成によることが確認されたものの、6 トレンチで瓦集積遺構および地山の落ち込みが確認でき、寺院関連遺構の可能性が考えられた。4・5 トレンチでは遺構面は検出できなかった。

令和元年度は、①6 トレンチにおいて見られた瓦集積遺構の広がり確認と瓦集積遺構下部における地山の落ち込み・溝状遺構の性格の解明（7 トレンチ）、②基壇推定地南方への遺跡の広がり（8 トレンチ）を目的として調査を行った。その結果、瓦集積遺構は 7 トレンチ南半および 8 トレンチにかけて帯状に広がるが、瓦集積自体は近世の陶器等も混じっており、堆積自体は近世以降のものであった。しかし、瓦集積遺構の直下に白色系の粘土質層が広がりをもって検出され、これが基壇造成土の一部である可能性を考えた。8 トレンチの南方では寺院に関する遺跡は確認できなかったが、調査終盤にトレンチ北端で 2 枚の平瓦が立てられた状況で出土し、昭和 45 年調査で検出された立瓦列との関係から、寺院創建時基壇の南縁である可能性が考えられた。

令和2年度は、①令和元年度調査で確認された立瓦が東西方向に列として確認できるか、および白色系粘質土の基壇状の高まりの範囲と形状(9トレンチ)、②基壇北縁の立瓦列の確認(10トレンチ)を目的として調査をおこなった。その結果、9トレンチでは東西方向に約6m連続する立瓦列を確認した。立瓦は裏込の一部に丸瓦を横方向に並べ、北側には砂を入れて人為的に固めた様子の土層が存在していることから、これが創建期基壇の造成土とその外側の基壇外装であると想定した。また、9トレンチ北西部付近で創建期基壇の西端と考えられる南北方向の2枚の立瓦を確認した。東西にのびる立瓦列の延長との交点から、創建期基壇の南西の2辺および、南西端の位置が想定できた。立瓦列の外側には、白色系粘土の基壇状高まりを確認した。この高まりは瓦列自体とは基軸方位が異なり、また不整形を呈することから、創建期基壇とは時期差をもつと考えた。9トレンチ南半では地山を削る東西方向の溝を確認した。基壇北縁の立瓦列の検出をめざして設定した10トレンチでは、河川改修・護岸工事によると考えられる造成土が深く、遺構はすでに滅失していた。

●本年度の発掘調査(図7・8)

本年度は、令和2年度調査で確認された創建期基壇西側の立瓦列と基壇北西隅を確認すること(11トレンチ)を目的として調査をおこなった。

その結果、以下のことが明らかとなった。

1. 創建期基壇西側の立瓦列を確認した。瓦列の掘方はトレンチ北端まで続いており、創建期基壇の北西隅は河川造成時に失われていることが判明した。
2. 創建期基壇の南北幅は、少なくとも8m以上に及ぶことが確認され、その規模から本遺構は建物内に仏像を設置する須弥壇ではなく、基壇である可能性が高まった。
3. 平成30年度に調査した1トレンチの南壁断面から、創建期基壇は掘込地業をおこない、その外装として瓦を貼り付けるという基壇の造成工程が明らかになった。
4. 基壇上に礎石の据付痕跡は確認できなかった。
5. 再建期に貼り足された白色土上に、立瓦列に平行する雨落ち溝(または雨垂れ痕)を検出した。再建期にも軒の出を有する建造物が存在した可能性が高い。

●出土遺物

本年度出土の古代寺院関係遺物としては、軒平瓦・丸瓦・平瓦などがある。

4. おわりに

2022年3月13日(日)、豊田産業文化センターにて、この発掘調査を含めた研究成果報告の公開シンポジウムを開催いたします。併せて足をお運び頂けましたらと存じます。

【参考資料】

田端 勉 1978 「(仮)伊保白鳳寺址」『豊田市埋蔵文化財調査集報 第六集 寺院址』
豊田市教育委員会

永井邦仁 2010 「伊保古瓦出土地」『愛知県史 資料編4 飛鳥～平安』愛知県

永井邦仁 2017 「伊保古瓦出土地」『新修 豊田市史 20 資料編 考古Ⅲ 古代～近世』
新修豊田市史編さん専門委員会

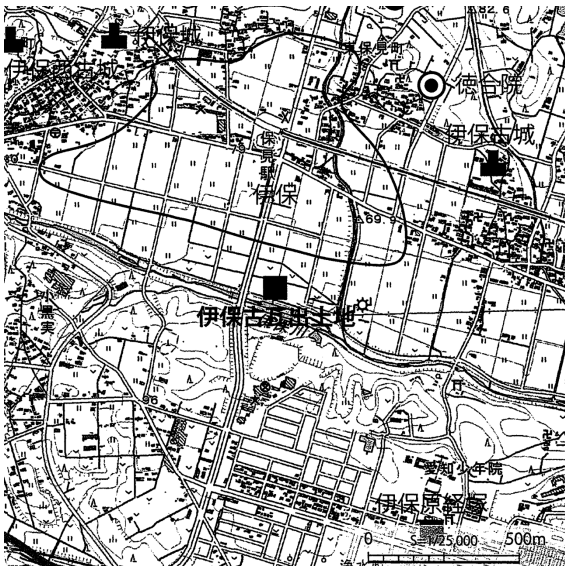


図1 遺跡の位置 (永井 2017)

* 今回の調査区は段丘崖と伊保川の間の狭小な台地 (図2のA地点付近) に設定



図2 遺跡周辺の地籍図を重ねた旧地形図 (永井 2017)

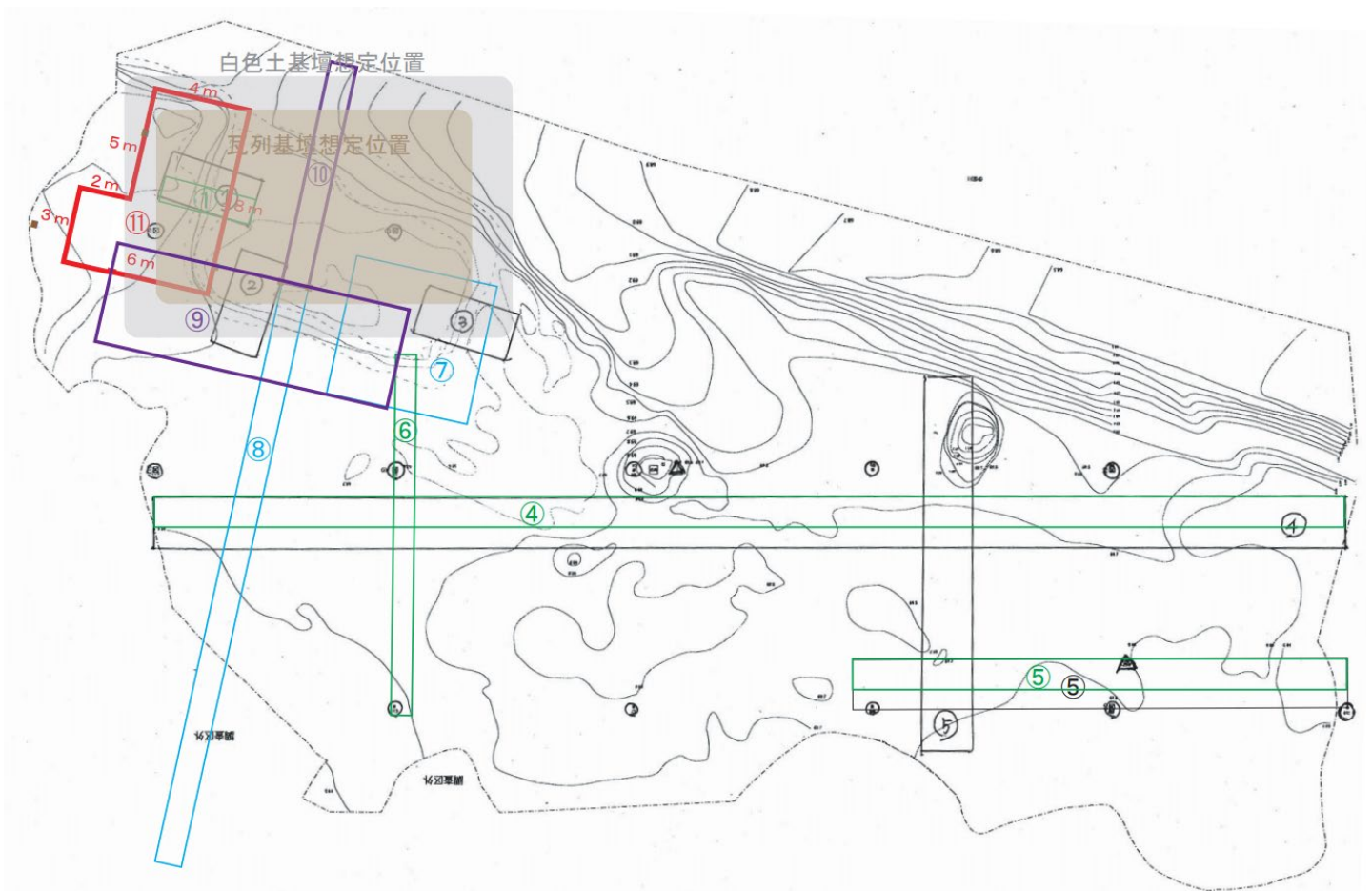


図3 伊保古瓦出土地 測量図およびトレンチ設定図 (300分の1)



図4 調査地周辺 空撮写真
(平成30年度調査時撮影)



図5 立瓦土壇の一例
(大阪府堺市 大野寺(土塔))



図6 9トレンチ 全体写真



9トレンチ・11トレンチ
3D画像QRコード



図7 11トレンチ 全体写真



図8 11トレンチ瓦列検出状況(東より)